クリエイティブティーチャーに学ぶ！
教科でキャリア教育
第5回：英語
群馬・県立 太田フレックス高校

英語の授業を通して「世の中」のことを伝え 異文化に「一歩踏み出す意欲」を育てる

2013年度から、英語の授業を英語で行うことが本格的に始まりますが、期待と不安が入り混じっている先生も多いようです。そんな変革のときだからこそ、改めて考えたい英語教育の意義。定時制で多様な生徒と接してきた先生の実践を紹介します。

取材・文／松井大助
撮影／竹内弘真

英語
齋藤理一郎先生

1968年生まれ。私立高校を経て、群馬県の公立高校の教員に。2007年に群馬大学大学院教育学研究科を修了。単語のつづりの定着など、学び直し英語の指導や、特別支援教育に力を入れる。日本LD学会、新英語教育研究会所属。

多様な生徒が安心して参加できる授業を目指して

齋藤先生の授業のことを、生徒の一人はこんなふうに語る。「先生のおもしろくないジョークがいきなり飛び出してきて教室内の空気を1℃下げるのが特徴」。

群馬県立太田フレックス高校は、午前・午後・夜間の授業を生徒が選んで受講できる定時制と通信制を併設した学校だ。柔軟なスタイルで勉強できる環境であり、生徒のなかには、小学校や中学校で不登校を経験したが、この高校でペースをつかんで学びを深められるようになった子も少なからずいる。また、外国籍の生徒も目立つ。日本語の理解はまだ不十分だが英語は話せる生徒などがいて、やはり柔軟な学習環境を求めてきたのだ。

そうした多様な生徒に、齋藤先生は英語を教えている。担当科目の一つ、「オーラル・コミュニケーションⅡ」では、もともと「英語を使う」ことを重視した科目なだけに、実技を多く取り入れた授業を展開してきた。

11月下旬の授業、教科書のトピックは、アメリカの祝日〝Labor Day〟を話題にしたものだった。齋藤先生は、まずは教科書を全員で音読することから始めた。

〝First, please listen to the dialogue〟〝OK, please repeat after the CD〟

数回音読してから、齋藤先生は、生徒たち自身が読みにくいところをチェックする時間を2分間取った。机間指導してそれらを把握し、長文で息継ぎ箇所が分かりづらいセンテンスはみんなで区切りを確認して読み直し、relativesのように読みにくい単語は、音節に区切って発音を練習。「読めたという安心感を生徒にもたせたい」のと「生徒の分からない部分は放っておかないことを伝えたい」という思いから、毎回必ず行っていることだ。

続いて、回りながらの音読。生徒が全員立ち上がり、1回目は正面を向いて、2回目は左を向いて、3回目は後ろを向いて教科書を音読し、読み終えたら座るという、これまた恒例の取り組み。生徒たちはおもしろがっていて、齋藤先生からすれば、各自の体の向きから「あの子が苦戦しているのかな？」とみて、フォローに行きやすくしたしかけでもある。

音読で内容が頭に入ったら生徒にクエスチョンを投げかける。ここまでのやり取りは、基本、すべて英語だ。ただし生徒が

回りながらの音読風景。齋藤先生も音読しながら、生徒が左に向きを変え始めるとそちらに移動し、生徒が後ろを向き出すと後方に移動する。

分からなそうな顔をしていれば日本語で補足するし、あいまにはジョークや感じたことの共有も日本語で口にする。

「ここは〝has〟な〝はず〟だよね！　あ、またみんなに流された…」

「Labor Dayに親戚一同で集まる話だったけど、日本にはこんな祝日あるかなあ」

考える、発表する、聞く、という活動を楽しめるように

さて、ここからが今日のメインの活動。〝So, I want you to build a new holiday!〟

齋藤先生は生徒に、新しい祝日を作ってほしいと呼びかけた。何月何日にするか決めて、祝日の名前とその由来も考えて、どんな祝い方をするかもイメージして英文にまとめる。それをみんなの前で発表し、聞いていた生徒は発言のポイントをメモ。英語の4技能を使う課題であり、また、祝日に由来があることを生徒自身が体感して、どの国の祝日にも背景にその地域の伝統や文化があるのだと考えさせることも狙った取り組みだ。

まずは一例として、グレートティーチャーの誕生日を祝う〝Riichiro's Day〟という案をぶちあげる齋藤理一郎先生。それを受けて、生徒も思い思いに祝日を考える作業に入った。

祝日のない6月に設けようと生徒から出た案が〝Humorous Day〟。笑ったり冗談を言ったりして楽しむ日。〝Rest Day〟。みんなが休む日でお店も全部クローズ！

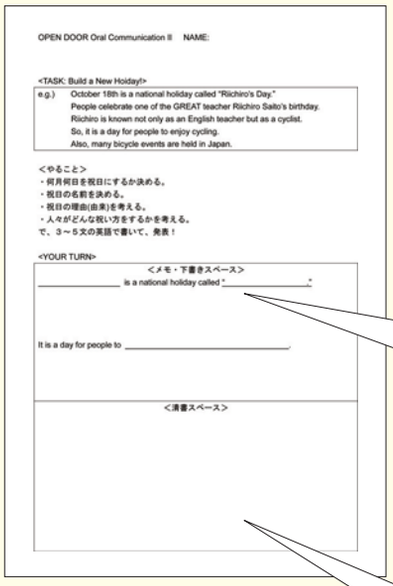
生徒の家族の誕生日などに設定されたのが〝Music Day〟。音楽を楽しむ日。〝Happy Day〟はお互いに祝い合ってケーキを食べる日。8月7日は「ハ・ナ」だからと出た案が〝Fireworks Day〟。花火を自由に打ち上げる日。各自の発表が終わるとみんなで拍手し、齋藤先生も「いいね、国会に提案しよう！」などと返す。

この課題は今日で終わらせる予定だったが、齋藤先生は急遽、残りの生徒の発表を次回の授業に持ち越した。「やる気がないのではなく、自由な発想がやや苦手で、日にちの決定から悩みすぎて進まなかった生徒もいた」ことに気付いたからだ。

「教室内の空気を1℃下げる」と評した生徒は、一方で今日の授業について「今回発表した、自分が考えた祝日が本当になれば良いのにと思った」とも語る。体感温度は下がるのかもしれないけれど、授業は楽しんでいて、自分の考えを英語で発表できたことへの満足感も得ていたようだ。

"Riichiro,s Day!"とガッツポーズしながら語る齋藤先生。笑い出す生徒から、あえてすまし顔をする生徒まで反応はさまざまだが、「発表する」ということで高まっていた教室の緊張感が一気に緩んだ。

生徒の発表・聞き取りの流れ



OPEN DOOR Oral Communication II　NAME:

<TASK: Build a New Holiday!>

e.g.) October 18th is a national holiday called "Riichiro's Day."
People celebrate one of the GREAT teacher Riichiro Saito's birthday.
Riichiro is known not only as an English teacher but as a cyclist.
So, it is a day for people to enjoy cycling.
Also, many bicycle events are held in Japan.

<やること>
・何月何日を祝日にするか決める。
・祝日の名前を決める。
・祝日の理由(由来)を考える。
・人々がどんな祝い方をするかを考える。
で、3～5文の英語で書いて、発表！

<YOUR TURN>

<メモ・下書きスペース>

_____ is a national holiday called "_____."

It is a day for people to _____.

<清書スペース>

>>STEP1
教科書の音読

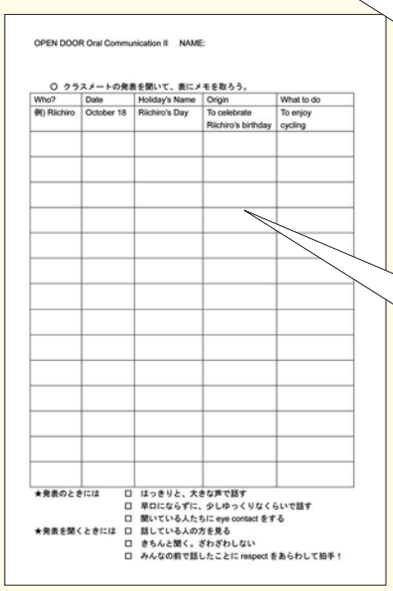
Reading

今日のトピックは
「米国の祝日 Labor Day」

>>STEP2
教科書に沿った
タスクに挑戦（英文創作）

Writing

今日のタスクは
「Build a New Holiday!」
プリントには創作例も提示



OPEN DOOR Oral Communication II　NAME:

○ クラスメートの発表を聞いて、表にメモを取ろう。

Who?	Date	Holiday's Name	Origin	What to do
例) Riichiro	October 18	Riichiro's Day	To celebrate Riichiro's birthday	To enjoy cycling

★発表のときには
□ はっきりと、大きな声で話す
□ 単口にならずに、少しゆっくりなくらいで話す
□ 聞いている人たちに eye contact をする
★発表を聞くときには
□ 話している人の方を見る
□ きちんと聞く。ざわざわしない
□ みんなの前で話したことに respect をあらわして拍手！

>>STEP3
清書した英文を
みんなの前で発表する

Speaking

今日は一人ずつの発表。
ペアで行うこともある。

>>STEP4
クラスメートの
発表を聞いてメモを取る

Listening

「誰が」「何を」と区分された表に
メモするので聞き取れた一部分
だけでも書き込める

群馬県立太田フレックス高校

School Data

単位制普通科／2005年創立
生徒数（2012年度）定時制課程631人
（男子313人・女子318人）
進路状況（2011年度実績）大学6.1%・短大2.6%・
専門学校等42.6%・予備校等1.7%・就職15.7%・その他31.3%
群馬県太田市下田島町1243-1
TEL 0276-31-8047
URL http://www.otaflex-hs.gsn.ed.jp/

Outline

2003年に群馬県教育委員会が発表した「フレックススクールの基本構想」をもとに設立された定時制と通信制課程をもつ単位制高校。午前・午後・夜間にある授業から、生徒自身が学びたい科目を選択し、決められた単位以上を修得すれば卒業できる。クラスや学年はなく、生徒は全員「ゼミ」に所属。立地する工業都市・太田市には在日外国人も多く暮らしているため、中南米を中心に10カ国以上の外国籍の生徒も通う。

全国の定時制・通信制高校の生徒の状況

小・中学校における不登校経験がある生徒／外国籍の生徒

	不登校経験		外国籍	
定時制	31,313人	31.3%	3,013人	3.0%
通信制	17,126人	14.6%	758人	0.6%
合計	48,439人	21.8%	3,771人	1.7%

特別な支援を必要とする生徒

	特別な支援		学習障害		発達障害	
定時制	7,103人	7.0%	2,890人	2.9%	4,283人	4.0%
通信制	6,400人	8.5%	1,015人	1.5%	2,038人	3.0%
合計	13,503人	7.6%	3,905人	2.4%	6,321人	3.6%

出典：全国高等学校定時制通信制教育振興会報告書

平成23年に全国高等学校定時制通信制教育振興会が行った調査研究の報告書より。全国804校（定時制655校／通信制149校）に送り、内739校が回答。多数の生徒がさまざまな困難を抱えながら頑張っている状況は、太田フレックス高校だけに限らず、定時制・通信制の高校に共通したことだといえる。

HINT&TIPS

1 自力で英語の情報にアクセスするには どうすればいいかを学ばせる

英語教育を受ける機会がなくなる＝本人の英語学習の終了だと、その後は英語に手も足も出なくなる。齋藤先生は必要に応じて「自分で英語の情報に近づける」状態にすることを重視。例えば、辞書を使って文例や用法まで調べるワークを授業に導入、生徒が卒業後も辞書を最大限活用できるようにしている。

2 スモールステップを踏ませる工夫で 達成感と学習意欲をもたらす

社会に出てからも「自力で英語の情報に近づける」ようにするには、英語への嫌悪感や苦手意識が払拭されていることも大事。そのためにはスモールステップの「できた」を積み上げることが有効だと齋藤先生は考える。例えば、つづりの定着→品詞の意識化→文法への気付きと段階を踏んで英文への理解を深める。

3 生徒のつまずきを分析・分類し、 パターンに合わせた対策を講じる

齋藤先生は、生徒のテストのつづり間違いを収集・分析し、パターンごとに対策を考えた。“l”と“r”の混同など日本語の音韻に干渉された間違いなら英語の発音に慣れさせる、スペルの順番間違いならなぞり書きの練習をさせる、などと。生徒のつまずきへの理解が深まると、具体的な支援をしやすくなる。

4 自分の居場所から一歩踏み出そう とする行動に目を配り、認めていく

生徒が英語の情報に近づこうとしたときや世界のことを知ろうとしたときは、小さな変化でもそこを認めたり褒めたりしたい。自分から異文化に踏み出す意欲が高まる。内にこもって未知の世界に関心を示さないままでは、英語の4技能を高めてもその力を発揮できる場は限られ、英語を通しての学びも少ない。

授業のミナモト

分かる喜びを届けたいのに 生徒に伝わらない苦悩

最初は分からなかったことが、学ぶなかで「分かった！」時の喜び。齋藤先生はその分かる喜びを届けたくて、教師になったという。教える科目に英語を選んだのは、語学が好きだったことに加え、

「英語の教科書に出てくる題材は、文学や社会科学から自然科学までさまざまですよね。英語の授業を通して、生徒に世の中のことをもっと知ってもらいたい、という欲張りな思いもあったんですよ」

だが現実は甘くなかった。懸命に教えても、特に勉強が苦手な生徒ほどついてきてくれない。悩む日々が続いた。

転機となったのは、30代後半に大学院に入学したことだ。つづりの定着の研究をするなかで発達障害のことを知り、文字を識別しづらいなど、自分とは異なる困難さを抱えた人がいることを認識した。

「不思議なことに、それ以降は特別なことをしなくても、生徒の授業の食いつきが変わったんです。『なんでこんなこともできないんだ』という意識が自分になくなった。それだけで授業が変わりました」

さらに現任校で、不登校で学習が遅れた生徒や、外国籍で日本語の授業が分かりづらかった生徒など、小・中学校で十分に学べなかった生徒のことも知った。

齋藤先生は考えるようになる。グローバル社会を見すえて小学校に英語が導入され、高校の授業は英語で行うようになるなど、英語教育の充実化が進んでいるが、その恩恵をうまく受けられず、学習が定着しない生徒がなお一定数いる。そうした生徒から英語が得意な生徒まで、誰もが学びを深められるインクルーシブな（包含した）英語の授業はできないか。

異文化理解に自分から 一歩踏み出せるように

でもどうだろう。日本人全員が海外に行くわけでも外国人と頻繁に話すわけでもないのだから、極端な話、英語学習に意欲的な子だけ重点的に教えれば良いことはないか。全員に英語を学ばせたいとすれば、その意義はどこにあるのか。

「英語で発信されるものには、日本とは違うものの見方をした情報があります。例えば歴史上の事件や戦争についても、日本語の情報と英語の情報では見方が違ったり。その異なる見方に生徒が自力でアクセスできるようにすること、それが英語教育の大事な要素だと思います」

なぜ異なる見方にふれさせたいのか。

「違う文化があるんだ、と理解してほしいからです。まずは自分から異文化に一歩踏み出して違いを認識し、その違う者同士がどう付き合えるかを考えてほしい。国内にいても、今後は多様な国や地域の人とのかかわりが増えるでしょうから。もっと言えば、外国人に限らず、自分と異なる立場の人を理解することはすべて異文化理解だと私は思うんです」

だから齋藤先生は、英語で異なる見方にふれた経験は社会でも生きると考える。

「前任校で生き方を考える総合的な学習の時間を担当した時、生徒たちの世界の狭さを感じました。限られた友達の輪の中にいる。ですが社会に出れば、苦手な人や理解しにくい人とも向き合います。その時にどんな行動を選択するのか。自分の考えを主張するのか、適度な距離を取って付き合うのか。異文化とかかわる時の『自分の間合い』を英語学習のなかで身につけて、多様な人がいる社会のなかで力を発揮できるようになってほしいです」

授業のエネルギー

生徒の変化がうれしいから教材研究にも力が入る

「先生の授業を受ける前は、分からないことをそのままにしていたので、英語は遠い存在だったけど、最近は身近な存在で、授業でやったフレーズを生活のなかで使ったりすることが多くなりました」

「先生が英語以外のこともたくさん教えてくれるので、おもしろい授業です」

「英語の発表は難しそうで最初はやる気も出ませんでした。でも発表するうちに少しずつ分かってきて、今では楽しさや達成感を感じられるようになりました」

「もともと英語は好きでしたが、日常的にしゃべることは少なかったので、この授業を受けて英語力が上がったと思います。もっと好きになりました」

「難しいと思った英語はそんなに難しくなかった」

授業の感想を求めると、それぞれの生徒のなかで英語との距離が縮まった、ということを感じられるコメントが並んだ。

「普段は怖くて感想なんて聞けない」という齋藤先生も「うれしい」と感慨深げだ。

ただ、これまでも授業を重ねるごとに生徒に「微妙な変化」が積み上がってきたことは見てきたし、そのことに力をもらってきたという。英語の発表を嫌がっていた生徒がさっと前に出るようになった。英文読解を投げ出していた生徒が辞書を引くようになった。英語好きの生徒が発表の仕方まで工夫するようになった。

そんな生徒の変化をもっと見たいので、齋藤先生は教材研究にも力を入れている。現任校の学校設定科目「演劇入門」に興味をもち、授業のアシスタントとして1年間参加。非言語と言語を織り交ぜたワークを学び、英語の授業に取り入れた。校外の研究会にも積極的に顔を出し、2012年には、ハワイでの英語研修も受けた。「先生の授業を受けてよかった」「勉強する気になった」と言ってくれる生徒が増え、齋藤先生の手ごたえも強まった。

齋藤先生は、演劇部の副顧問も担当。校外自主公演も行うなど活発に活動する生徒たちと一緒に、演劇のもつ力を体感している。

「みんなで楽しくやれるのが良い」という感想もあったこの授業には、TOEIC835点の生徒からまだ英語に不慣れな生徒まで参加している。

英語の授業における「分かった！」とは？

「でもいい面だけ言うのも変なので、つけ加えさせてください。私の授業ではまだ生徒を『分かった！』という気持ちにはあまりできていないと思います」

英語の授業における「分かった！」とは、具体的にはどういうことだろう？

「英語の穴埋め問題をできたとかではなくて。英語の情報を見聞きした時に、一単語一単語を日本語に置き換えなくても、英語を英語のままで理解できたような時です。相手の言いたかったことに自分の思考がシンクロするような心地よい感覚。英語を『自分の言葉』にすることができた。そう感じられるような体験をさせることが、異文化に一歩踏み出す意欲と自信をさらに育てると思っています」

授業を受けるなかで、英語という教科にどんな印象をもつようになったか。その質問に生徒の一人はこう答えてくれた。

「違う国の言葉なので、やっぱり勉強するのは難しいけれど、知らないことだらけなので、できた時の感動が大きい」

授業で生徒につけたい力

	知識	能力	意欲・態度
つけたい力	**英単語や定型表現** ・単語や定型表現の発音や意味を学ばせる。 ・正しいつづりで単語を書けるようにする。 **品詞の概念、文法** ・文法に深くかかわる品詞をまず意識させる。 ・文法規則に帰納的に気付かせる。 **世の中の物事** ・教科書の題材を通して世の中のことを知らせる。	**伝えたいことを表現する力** ・自分の考えを英文にまとめる経験や、みんなの前で発表する経験を積ませる。 ・「適切な声で話す」「アイコンタクトを取る」など非言語の表現のポイントも意識させる。 **辞書を有効に活用する力** ・授業のワークを通して、英語の情報を調べる時に辞書をどう活用すればよいか学ばせる。	**一歩踏み出そうとする意欲** ・安心できる雰囲気の中でワークや発表に挑戦させ、英語を使えた達成感と自信をもたらす。 **異文化理解と自分の間合い** ・教科書の題材などで、異なる文化があることを認識させ、好きでも嫌いでもいいので、そこから背を向けるのではなく「自分の間合い」で付き合っていくことを考えさせる。
その力が将来にどう生きる？	**多様な地域の人との意思疎通に役立つ** ・約4億人とされる英語を母語とする人や、約16億人とされる英語を第二言語や外国語として使う人と、共通言語として意思疎通できる。 **企画や開発、創作のヒントを得られる** ・世界中の英語情報から発想を得られる。その情報収集はビジネスの企画から学術研究や技術開発、創作活動まで幅広い分野で行われている。	**さまざまな交渉やプレゼンに役立つ** ・海外との取引先と契約交渉を会議やメールで行う時、研究成果を世界に向けてプレゼンするときなどに表現力が生きる。非言語の表現力は、日本語での交渉やプレゼンにも役立つ。 **いつでも自分で英語の情報に近づける** ・卒業時に仮に英語力が低くても、その後必要に応じて、辞書を使って学習や調べ物ができる。	**新しい情報を吸収して成長していける** ・気になることを地球規模で調べたり、見知らぬ地に飛び込んでみたりして知識や経験を積み、社会人として成長していくことができる。 **多様な人と協働できる** ・考えや価値観の異なる人と出会っても、拒絶したり飲み込まれたりせずに、お互いの最適な距離感を模索しながら付き合えるようになる。